
仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークロッカーリー始まりの物語

【Zコード】

Z0459Z

【作者名】

sinne -キヨノリ

【あらすじ】

この世界は、平和な筈だった。ある日突然、不思議な者達がその平和な筈だった世界を脅かす。其処に現れたのは、クロッカスと時計を模した仮面ライダークロッカーリー。^{*}これは仮面ライダーを基にした全オリジナル小説です。苦手な方はすぐに逃げたほうが良いです。

1話「出合い、始まり、青年の変身」（前書き）

ララ「前書きとあとがきだけで登場します！鈴海ララで～す」

ルル「同じく鈴海ルル」

ララ「じゃ、今回のは完全オリジナルだよ！」

ルル「他のsinne執筆小説に特別ゲストとして出ていくりじこ」

「話「出会い、始まり、青年の変身」

「は〜」

青年が居た。

青年の名前は下樹雪人。
しもきゆきと

F・Tという花屋で働く青年だ。

彼が溜息をついてる理由は、今月の食費諸々についてだった。

「何で、こんな風になるんだ〜。。。俺って、結構金遣い荒かつたつけな〜」

自分の所持金を見てもう一度溜息をつく雪人。

「バイト。。。増やそつかな。。。」

仕事をすでに結構している雪人にとっては、もう自分の為に使う時間は少なくなつて来ている。

それでも自分の生活費だけは稼がなければいけない。

「あ、雪人くん！」

「あ、薔薇さん」

彼女は薔薇花苗。
つぼみかなえ F・Tの若き店長である。

「だから、雪人君。花苗って呼んでつて言つたでしょ。で、どうしたの?こんな所で呆然として」

「いや～。生活費が厳しくなって・・・」

「また！？雪人君は、金遣いが荒いのよ。もう。はー

「え？」

花苗は雪人に手を差し出した。

「今日ぐらいは私が奢つてあげる。結構お世話をになつてゐしね

「・・・ありがとな～！～薔さん～！」

「だから花苗つて呼んで！」

「はいはい」

* *

「はあ・・・はあ・・・」

少年が走っていた。

「見つけた。こっちに来い！」

「誰だ・・・」

「覚えてないのか。なら、力づくで捕まえるしかないか

「はあ・・・はあ・・・」

少年は、追つてくる者に追いつかれないよう、全力で走る。

* * * * *

「あ～、良かつたあ、もう、本当に今月ピンチだつたんだよ。ありがとな、薔さん」

「だから、花苗って呼んでつて言つてるでしょ。じゃあね。雪人君」

そう言って、花苗は帰つて行つた。

「ふう。良かつた良かつた。
ん?」

雪人はあるモノを見つけて。

「君は…・・・」

それは、少年だった。

「どうしたんだ？ 君は

「ほへは、クキル。お兄ちゃんは？」

「俺は下樹雪人。で、どうして此処でこんな事してるんだ?」

雪人はクキルと名乗った少年に尋ねる。

「ぼくは、何でだろう？ 何だか、追われてるみたいなんだ。ねえ、雪人お兄ちゃん。ぼくを連れてつてくれる？」

自分がよく分かつてないように言つクキルに対し、雪人は

「分かつた。でも、俺に着いてきてもあまり養えないと？」

「どうでもいい。ただ、あいつらから守つてくれれば良いから」

「分かつた。じゃ、付いて来な」

「うん」

雪人はクキルを連れて家に帰る。

「これが、クロツカーの資格者……」

クキルは、雪人に気付かれない様に呟いた。

その近くでは、不思議な少女と少年が居た。

「ねえ、アレク。あれが、クキルなの？」

「そちらしいわ……。コトト。もう少し、彼を偵察してみるわ。
それと、あの雪人という青年についても」

「分かつた」

* * * * *

「ねえ~、雪人お兄ちゃん」

「何だ？あと、俺の事は雪人って呼んでくれ、何だか変な感じがするつて言うか、悲しくなるんだ」

「…………うん、分かった。雪人。ねえ、此処が、雪人の家？」

「ああ、クキル」

「何？」

雪人はクキルに訊く。

「本当に俺でよかつたのか？」

「うん。雪人じやないと駄目だから」

クキルは、雪人に妙な執着を持っている。
それは出会ったときから既に分かる。

その時

「ううつ！」

「どうした、クキル」

「何だか・・・西の方向から、悪寒がする。何か、怪物が暴れいるみたいだ！」

「怪物・・・」

いきなり苦しみだしたクキルに、雪人は疑問に思う。

「雪人・・・付いてきて!」

「え?あ、ああ?」

クキルは突然雪人の手を握ったかと思うと、雪人の手を引いて走つて行つた。

* * * * * * * * * * * *

「ふふふ・・・。丁度良かつたわね」

「モノの破壊衝動を吸い取り、何かを怪物にする。これは、ブレイクモンスターとでも言つておく?アレク

「そうね」

先程の少年と少女が石の怪物を引き連れている。

「あら、そちらから来ててくれたようね」

其処には、クキルと雪人が居た。

「クキル、一体何なんだ」

「雪人。これを使って!」

クキルが雪人に渡したのは時計。クロツカスの紋様が彫られている。

「それは!」

少女・・・アレクが驚いたように言つ。

「これは、何だ？」

「クロックベルト。これでクロッカーに変身して！」

「・・・」

「お願ひ！」

必死で言つクロキルに雪人は心を打たれ、受け取つていた。

「分かつた。必死に言つ願い事は、叶えてやらなきやな。じゃ、行くぞ」

雪人は、クロックベルトの鎖を腰に巻きつける。
そして、時計部分を開けて言つた。

「変身」

其処には、クロックカスと時計を模した者に変身していた。

「仮面ライダークロックカー。か」

アレクは、そう言い放つた。

「成る程、なら、行かせて貰う!」

続く

1話「出合い、始まり、青年の変身」（後書き）

てわけで、またはじめてしまった・・・。
何だか次々とはじめてしまう・・・。
もうそろそろ何か終わらせなきや？（全部大して進んでない）

2話「クキル、雪人、青年の初陣」（前書き）

カズマ「今回のあらすじは俺達です」

シンジ「何で……？」

カズマ「まあ良いだろ、これの本編ではまず出ないんだしさ

シンジ「ま、いつか。前回の出来事」

カズマ「

青年、下樹雪人は生活費に困る普通の花屋店員。

ある日、勤務先の店長との食事の後、クキルという少年と出会い。そして、悪寒がすると言ったクキルに、雪人は付いていった。

そしたら、ブレイクモンスターという怪物が暴れていた。

雪人は、クキルに渡されたクロックベルトを使って変身。

仮面ライダークロック・・・じゃなくて、仮面ライダークロック力

ーになつた！

「

シンジ「カズマ・・・」

カズマ「いや・・・つい、な

2話「クキル、雪人、青年の初陣」

「仮面ライダークロッカーか……」

少女は言い放つた。

其処に立っているのは、クロッカスと時計を思わせるデザインの仮面ライダー。

「クロッカスか、俺の好きな花だな……まあいい、まずは、其処に怪物を倒すんだろ、クキル」

「うん、ゆきと雪人」

「よし、じゃあ、行くぞ！」

雪人・・・クロッカーはチーンソーを思わせる怪物へ立ち向かって行つた。

「それにしても、チーンソーなんて、物騒なもんだな～」

雪人は、軽々とブレイクモンスターを振り回す。

「何だアイツ！」

少女は言つ。

「アレク、だつたつけ？雪人には、これまでに居ないほどクロッカーの資質を持っている。僕には、すぐに分かつたんだ」

「・・・・・」

アレクと呼ばれた少女は、今までに無い苛立ちを見せている。隣に居た少年・・・コトトは、アレクに

「アレク、今の僕達に勝ち目ないよ、早く行け!」

「・・・悔しいけど、私達にクロッカーに立ち向かう程の力は無いわ、コトト。行きましょう!」

「うん」

そう言って、二人は姿を消した。

「くそつー!あいつら敵前逃亡か!まあいい、俺の相手はこっちだろう!」

クロッカーは叫びながらチヨーンソーのブレイクモンスターと戦っている。

「何か武器は無いのか!」

「武器・・・。あ、ベルトの横にある剣、そのボタンを押して!」

「分かった!」

クロッカーはクキルの言つとおりにする。

「そしたら、相手に降り下ろして!」

クロツカーハブレイクモンスターに剣を振り下ろす。

その時、ブレイクモンスターは崩れ落ち、中から人が出てきた。

「・・・!」これは・・・

「雪人の知り合い？」

「ああ・・・・・ 桜木英樹。
さくらぎひでき
俺の中学の知り合いだ」

何故、ブレイクモンスターの中には人が居たのだろうか？

「なあ、クキル」

雪人は変身を解いてクキルに訊いた。

「何？雪人」

「あの、ブレイクモンスターって何だ？ 何故、中に人が……」

……それについては、家に戻つてから」しよう」

・・・ああ、コイツも、家に連れ帰るか

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

「で、ブレイクモンスターって、何だ？」

此処は雪人の家。

英樹は、現在雪人の家の寝室で寝させている。

「ブレイクモンスター、つていうのは、人とかの破壊衝動を動かして人を怪物の仲に取り込む。周りのモノの破壊衝動も吸い取つて、破壊だけをする人形なんだよ」

「そんなものが・・・」

「うん、それを作るのは、破壊者・・・まあ、僕はブレイカーツ呼んでるけどね。その人達が、ブレイクモンスターを作ってるんだよ」

「なあ、何で、クキルは、其処まで知つてるんだ?」

雪人はクキルに訊いた。

「・・・分からぬ、僕、いつのまにか追わられてて、いつのまにかクロックベルトを持つてて、何故かその事を知つてた。でも、雪人と一緒に居れば、思い出せる気がしたんだ」

「・・・俺はな、剣空手、柔道、とか、そんな感じの格闘技やつてたんだ」

「だから、結構戦闘が出来たんだ」

「まあ、な。でも、アイツ・・・雪良が死んでから、やめたんだ。雪良が居たから、頑張っていた。アイツが居なくなつて、泣いて、泣いて、涙が枯れるまで泣いて、それで、英樹に救われたんだ。薔

さんとか、F・Tの人達にな

雪人が過去の話をするのは、クキルが初めてだつた。雪人は、今まで妹の事を思い出して悲しくなるから、とこの話をする事を拒み続けていた。

妹が居なくなつてから雪人には何も無い毎日があつた。

悲しみのどん底から雪人を助けたのは、桜木英樹と薔花苗だつた。

「ふうん・・・だから、”お兄ちゃん”って呼ばれたくなかったんだ」

「・・・ああ・・・」

雪人は、寝室に行つた。

「英樹・・・」

「・・・雪人、此処は・・・」

「俺の家だ。お前、路上で倒れてたんだぞ」

雪人は、あえてあの事を言わず、倒れてたとだけ言った。

「そりなのか！？いやー、それにしても、変な夢見たな～」

「変な夢？」

雪人は英樹に訊いた。

「ああ、なんか、変な少女と少年が、俺に羽を投げつけて來たんだ。

そして、気が遠くなつて怪物の中に閉じ込められて暴走してゐつて夢。ま、何か変な奴に止められたんだけどさ。何処から夢で、何処まで現実だつたんだろうな～。いや、全部夢か？」

「へえ～、そんなの見る事もあるんだな～」

雪人は反応を示さないよつと言つ。

「それ、お前の悪い癖だな」

「は？」

「いや、何でもねーよ。世話になつたな。じゃ」

「あ、ああ・・・」

雪人は、英樹を見送つた。

英樹が帰つた後、クキルは言つた。

「あの英樹つて人・・・雪人がクロツカーつて知つてる・・・なん
で？」

「アイツには、昔から変な才能あるんだよ。それのせいで虐められ
た事もあつたんだ」

「ふうん」

続く

2話「クキル、雪人、青年の初陣」（後書き）

カズマ「2話も終わつたな」「
シンジ「な」

カズマ「これだけ・・・なのか?」「
シンジ「らしいね」

3話「雪恋、英樹、切なる願い」（前編）

今日は過去の話とか、色々があるので戦闘ないです。

3話「雪良、英樹、切なる願い」

「……ねえ、^{ゆきと}雪人」

「どうしたんだ?」

英樹^{ひげき}が帰つた後、クキルは雪人に尋ねて来た。

「英樹つて人、何か不思議な力持つてたの?」

「ああ、何だかな、超能力保持者だつたんだ」

「超能力保持者?」

「稀に居るんだよ。あまり居ないし、アイツの力は強い方だつたらな」

雪人は語る。悲しげな表情をしながら、クキルに語る。

その図は、まるで兄弟の様だった。

「そうだな、じゃあ、最初から話すか。英樹の事も、^{せつら}雪良の事も

「うん」

それは、十数年前の事だった。

まだ小学校3年生だつた俺は、転校して来た英樹に興味を持った。

「はじめまして、俺は桜木英樹。^{さくらぎひでき}よろしく」

浮かないような、悲しげな、堅い表情の彼が教室に入ってきたとき、俺は驚愕した。

小学校3年生にしては、大人びていた事に、俺は驚いたのだ。
最初こそは皆大歓迎した。

でも・・・

「何だよそれ！幽霊なんて居るはず無いだろ！」

「何でそれ知ってるんだよ！そ、それは誰にも言つてないことだつたのに！」

「お前・・・何者なんだよ！化け物！」

「怪物！」「化け物！」

誰も知るはずの無い事を知つていたり、道端で誰かと話したり、感情が高ぶった時に周囲のものを浮かばせたり、普通の人間では出来ない事をアイツはしていた。

無論、人間は普通じゃない存在を否定し続ける。そんな存在だ。自分達より強い何かがあると、怖い感じる心の弱い人間達は、彼の存在を否定した。

そう、先生までも、それを否定した。

「なあ、桜木」

「何だよ、お前も、俺を馬鹿にするのかよ」

「違う。俺はお前を馬鹿にするんじゃない。怖いとも思わない」

「じゃあ、何だよ」

「俺は、お前を信じる。お前も、俺を信じろ」

「だから、何だ」

「だから～ら～つ！俺とは友達になろうってさ」

英樹は、人を信じるのは、俺が初めてだと言っていた。
俺とは、ものすごく仲が良くなつた。

俺と過ごして行く内に、英樹は超能力の抑え方とかを習得していく
た。

「なあ、雪人」

「何だ？ 英樹」

「俺さ、強くなりたいんだ。なあ、一緒に空手しないか？」

「ああ！ いいぜ！」

英樹の、強くなりたいという願い。

それは、自分の強さがほしかったからだ。

超能力じゃなく、自分自身の強さがほしいって、彼が言つていた。

でも、悲劇は起つた。

雪良が死んだのだ。

「せ・・・・・雪良・・・・」

「…………」

眠っている雪良に、俺は手を触れた。
冷たくなっている。

「…………」

「俺、部屋、出るよ」

「あ、ああ・・・・・

英樹は、俺が何も言わずとも、俺の心を読んで、部屋を出た。

「雪人・・・・・

その日以降、俺は空手を辞めた。

そして、ある日の事だった

「なあ、雪人」

「どうしたんだ? 英樹・・・・・

「もうそろそろそぞろ、卒業だから、仕事見つけよつせー」

「そつ・・・・か・・・・・

「ほりほり、君の憧れの薔薇^{つばめ}の経営する花屋で働くつぜー・店員募
集中だしさ」

「あ・・・ああ・・・」

それでも、俺は気が乗らなかつた。とても大事なものがぽっかりと空いていた。

「ほり、雪人君ー。」

「薺・・・さん・・・」

「何ボケーっとしてるのー。私も誘つたじやない。F・Tで働いてくれる?つて」

「「」めんなさい・・・」

その時、薺さんは俺の頬を叩いた。

「・・・・・ー。」

「妹さん!くして、気が落ちてるのもわかるけど、いつまでもウジウジしてちゃ、何も始まらないよー。」

「薺さん・・・。俺、何か、間違つてたみたいだな。ありがとな、
薺さん」

まだ、気持ちは落ちているけど、俺は、少し元気になれた。

「俺の話は、ここまでだ」

「それで、雪人は、F・Tに入ったの?」

「ああ」

雪人は、ぼおつと空を見ていた。

クキルも、つられるように外を見ていた。

続く

3話「雪良、英樹、切なる願い」（後編）

ちなみに雪人の年齢は23歳。
薔、桜木も同じ年齢。

「うー」「ふえー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459z/>

仮面ライダークロッカー～始まりの物語～

2011年12月5日20時46分発行